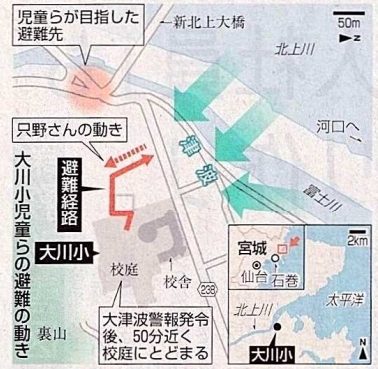
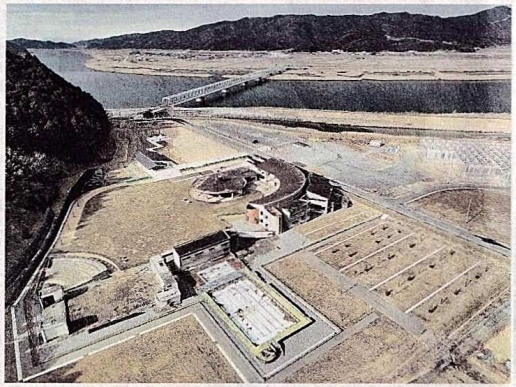
東日本大震災 12年

大川小 卒業生の葛藤

あの日、一変した生活

東日本大震災で、宮城県石巻市立大川小は児童・教職員計84人が津波の犠牲となった。遺族が学校側の責任を問うた裁判、校舎の解体を巡る議論、世間の注目―。楽しかった母校は悲劇と争いの場となり、家族や友人を亡くした児童たちの葛藤は卒業後も続いた。重圧と向き合い、新たな人生を選んだ3人の12年を追った。




震災遺構として整備された宮城県石巻市の大川小。奥は北上川（ドローンから）

「校舎残そう」声上げ保存

2011年3月11日の東日本大震災当時、大川小の全校児童は108人。後に「奇跡の少年」と呼ばれる只野哲也さん(23)は当時5年。中学2年の佐藤そのみさん(26)は6年に妹が、高校1年の永沼悠斗さん(28)は2年の弟がいた。小さな集落でのびのび過ごした生活は、あの日を境に一変した。

大川小は、山と北上川に挟まれ自然豊かな人口500人ほどの釜谷地区に立地。河口からは約4キロ離れている。午後2時49分に大津波警報が発令されたが、児童らは50分近く校庭にとどまった。近くの新北上大橋のたもとへ避難を始めた直後、川をさかのぼった津波に襲われた。

児童・教職員80人が死亡し4人は行方不明。学校にいて助かったのは児童4人と教員1人だった。その1人の只野さんは妹の未捺さん＝当時(9)＝を、佐藤さんは妹のみずほさん＝当時(12)＝、永沼さんは弟＝当時(8)＝をなくした。

地震発生後、保護者らに引き取られた27人は全員無事だった。校舎のそばには授業で使った小高い裏山があった。なぜ避難できなかったのか。14年3月、一部の遺族が学校側の対応に過失があったとして石巻市と宮城県を提訴。楽しかった母校が争いの場となる。永沼さんは複雑だった。

3人の生活は一変した。家族を亡くし、十分な食べ物はなく、只野さんと永沼さんは家も津波に流された。親は仕事や行方不明者の捜索などで忙しい。只野さんは「奇跡の少年」とされ、取材が殺到した。悲しむ暇もなかった。

佐藤さんは14年、「大川小が解体される」と聞いた。ガラス張りの渡り廊下やホールを備えたデザインの校舎は津波で壊れたまま。「もう見たくない」という遺族や住民もいた。しかし「これ以上何かが変わるのは嫌だ」と思った。

校舎を残そう。只野さんや佐藤さんら若者が集った「チーム大川」は東京や仙台のほか、一番伝えたかった地域住民の前で訴えた。少し年上で、チームに加わらなかった永沼さんも地元で声を上げた。16年3月、震災の記憶や教訓を次世代に残す「震災遺構」として保存が決まった。

裁判は19年10月、事前防災の不備など市と県の責任を認める仙台高裁判決が確定。震災遺構となった校舎は21年7月、一般公開され、全国から訪れる人に教訓を伝える。永沼さんも「語り部」を務める。佐藤さんは友人や家族を亡くした当時の子どもたちをテーマに映画を撮った。

周辺は災害危険区域に指定され、更地が目立つ。かつての町並みも子どもたちが遊ぶ姿もない。それでも「大川にまたみんなが集まるコミュニティーをつくる」。只野さんの次の目標だ。

重圧だった「奇跡の少年」いま伝承

只野哲也さん

地元の若者らと震災伝承などに取り組む任意団体を立ち上げた只野哲也さん(右)＝仙台市

只野哲也さん(23)は津波に遭い、助かった4人の児童の1人だ。学校で何が起きたのか。証言を続けてきた。「奇跡の少年」と呼ばれ重圧を感じ「『大川小の只野哲也』をやめたい」と悩んだことも。ただ、災害で子どもの犠牲をなくしたい思いは変わらない。今、学校がつないだ仲間と、防災や伝承活動に励む。

あの日、避難の列の先頭付近にいた。県道に出る直前、津波に気付き引き返し裏山を駆け上がった。後の記憶はない。目覚めると体が泥に埋まっていた。約1週間後、取材に見たままを伝えた。

奇跡だと思わなかった。偶然助かっただけ。なのに、いつしかメディアや世間が求める姿を演じていた。同級生らの命日、手を合わせに向かう道中で「今年は取材にどう答えようと考えた。他人の視線を気にし、取材を避けるようになった。

大きな転機は2021年8月。広島への訪問だった。原爆ドーム、資料館、被爆体験者の話。「大川小も広島も人災だ」。どちらも救えた命だと気付くことができた。伝承の意味を考え直した。

22年2月、地元の若者ら15人と団体を設立した。「未来のいのちを救う」「子どもの笑顔を守る」「みんなと向き合い心を育む」を理念に、伝承や防災に関する研修に取り組み、大川小校舎の保存や修復も訴える。

同年6月、南海トラフ巨大地震で最大34㍍の津波が想定される高知県黒潮町への訪問では、中学生に講演。子どもに伝えるための、多くの課題と成果をつかんだ。

8月、大川小で「おかえりプロジェクト」を初開催。中庭では当時の児童数と同じ108個の紙灯籠が校舎を明るく照らした。亡き友や地元を離れた人の〝帰る〟場所となるように。葛藤を経て、「大川小」にそう願いを込めた。

震災時は大川小5年。「Team 大川未来を拓くネットワーク」代表を務める。

震災と対峙 映画を撮り 次の人生

佐藤そのみさん

大川小の映画を製作した佐藤そのみさん＝東京都渋谷区

大川小の映画を撮らなければ、次の人生に進めない―。6年の妹みずほさん＝当時(12)＝を亡くした佐藤そのみさん(26)は、カメラを手にあの日と「対峙」した。監督として遺族らの葛藤を表現した作品を3年前に完成させ、震災から少し離れて「好きに生きてもいい」と思えるようになった。

文章や漫画を書くのが好きで、大川小では同級生と雑誌を合作、教室に置いた。仙台市が舞台の映画を見て、大川の美しい景色を映像に残したいと夢見ていた。

震災後、取材のカメラに「妹の分も真面目に生きなきゃ」と応じたが、「かわいそうな子」という切り取られ方に自分が自分じゃない気がした。進学した日大芸術学部でも違和感は増した。友人たちは「被災者」として応援してくれる。ありがたいが、期待に押しつぶされそうだった。

傷つき変わった古里の風景、いつも一緒だったのに夢でしか会えない妹。思い出の校舎まで壊されたら、自分を形成するものがなくなってしまう。「早く映画を撮らなければ」。焦りが募った。

大学を1年間休学、アルバイトで資金をため脚本を書き、撮影で大川小に足を運んだ。完成した映画では、当時の子どもが、亡くした友人や家族への手紙を朗読し、何を感じてきたかを伝える。自身も「世の中の空気は、生き残った子たちをさらに追い詰めた」「あの日との対峙は、私たちが辛うじて生きられる理由だ」と言葉を紡いだ。

東京や高知などで上映会が開かれ、震災を経験していない人が「過去の自分と重ねて見た」と感想を寄せた。大切な誰かを失った人に寄り添えたなら、報われた気がする。復興で変わる風景も、穏やかに見られるようになった。

今、東京で会社員として忙しい毎日を送る。「震災とは関係のない表現もできるようになりたい」。新たな創作にも踏み出すつもりだ。

震災当時は中学2年。帰宅後に被災、自宅近くの高台に避難した。

伝えたい 悲劇だけでなく思い出を

永沼悠斗さん

大川小で「語り部」をする永沼悠斗さん＝宮城県石巻市

卒業生の永沼悠斗さん(28)は、震災遺構となった大川小で、記憶や教訓を語る「語り部」をライフワークに選んだ。2年の弟＝当時(8)＝を亡くしたが、伝えたいのは悲劇ではなく、学校や地域の楽しかった思い出。訪れる人が防災について考えるきっかけとなることを願っている。

大川小在学時は野球に熱中。読書も好きで、図書室では本を取り合った。一輪車は人気の遊び道具で、争奪戦になった。母校での思い出は尽きない。「地域、先生に大事に育ててもらった」。大好きな学校だった。

卒業して4年後、母校を津波が襲った。弟が亡くなったと知らされたのは6日後。目にした校舎は、変わり果てた姿になった。「何も考えられなかった」

悲劇は全国に知れ渡った。しかし思い出の母校が悲しいだけの場所としてのみ語られ、もどかしさが募った。「自分に何ができるか」。大学生になり生活が落ち着きを取り戻し始めると、自問自答した。答えが伝承活動だった。「卒業生として語り継ぐことが自分の責務」

語り部活動の傍ら、2016年、防災士の資格を取得。地域を深く知ろうと被災前の姿を模型で再現するプロジェクトにも参加した。防災を学ぶため、教員を目指して入った大学をやめ、翌年に別の大学に入り直した。

今は仕事の合間を縫い、昨年から個人で毎月1回「語り部」をしている。「被災の経験をいろいろな形で還元し、防災と減災につなげたい」。終了後の聴衆とのディスカッションや拡張現実（AR）のアプリを使った地区案内、語り部のライブ配信など新しい伝承活動の形にも挑戦。阪神大震災の被災地との連携にも取り組む。

震災当時は高校一年。授業中に被災した。宮城県内の大学を卒業、21年、地元企業に就職した。